# 軍事郵便と軍隊手帳を読み解く

## 兵士の記録

横浜の兵士の記録が、ようやく集まりつつある。しかし、これらの記録から兵士の戦争体験を再現しようとするとき、ぶつかる問題がある。

それは、今は存在しない旧日本軍の複雑な組織であり、中国大陸から東南アジア、太平洋まで広がる広大な戦場と様々な部隊の配置である。とくに日中戦争が始まってからは、軍事機密が厳格になり、軍事郵便は検閲を受け、派遣先や所属部隊名すら秘匿された。部隊の通称号（秘匿名）は、軍事郵便だけでなく、軍隊手帳の履歴や様々な書類でも使用されている。

そのため、軍事郵便や軍隊手帳といった戦前の記録では、まず部隊名から読み解いていく必要がある。兵士一人一人の履歴（軍歴）は、兵士の戦争体験を再現するために欠かせないからである。

各部隊や戦闘の記録は、防衛省の他偕行文庫などにも所蔵され、またWEB上でもアジア歴史資料センターで閲覧することができる。部隊の通称号について調べることもできる。また、個々の兵士の軍歴については、親族であれば厚生労働省などに問い合わせて知ることができる。戦後に書かれた兵士自身の証言や手記も、様々な機関やWEB上で数多く公開されている。

今回は、横浜に残されている軍隊手帳と軍事郵便を対象に、旧日本軍関係の記録をどの様に読み解いていくことができるかを探ってみたい。

## 横浜の戦死者数

最初に、横浜出身兵士の基本的な情報を確認しておきたい。横浜には連隊の駐屯がなく、甲府連隊区に属していた（一九四一年に横浜連隊区が設けられるが連隊の駐屯はなかった）。したがって、全てではないが多くの兵士が甲府連隊に入営し、その後各部隊に配属された。甲府連隊の戦争中の動きなどについては、これまでの『市史通信』でも紹介している。ここでは、戦死者数という側面から、横浜出身兵士の実態の一端を紹介しておきたい。

横浜出身兵士の戦没者数は、神奈川県が一九六五年の調査をまとめたものによると、一万九八五一人にのぼる（『生活援護課業務関係資料集』神奈川県福祉部生活援護課、一九九四年）。一方、横浜市史編集の過程で、三ツ沢の横浜市戦没者慰霊塔の名簿を集計したところによると、戦没者数は二万一五四〇人（『横浜市史Ⅱ』第一巻下、横浜市、一九九六年）であった。

二つの記録には一七〇〇人近いずれがあるが、これは調査時期や調査対象者の違いによるものと思われる。いずれにしろ、横浜市ではおよそ二万人に及ぶ戦死者があったと考えてよいだろう。当然県内の市町村では最も多く、県の記録に基づけば県内の三九・六％を占める。一九三五年当時の横浜市の人口は約七〇万人で、県人口の三八パーセントだったので、ほぼ人口比率相当といえる（『神奈川県史　資料編二一　統計』神奈川県、一九八二年）。

戦没者の内訳を見ると、陸軍が一万四七八一人、海軍が五〇七〇人となっている（以下、いずれも県の統計による）。戦没地域別では、フィリピンが最も多く、次いで中国大陸、そしてマリアナ諸島とインドネシア方面、その他南洋諸島、ニューギニア方面、仏印・ビルマと続く。硫黄島を含めると、南方での戦死者がほぼ六割を占める。

海軍のみの内訳では、南方が七割を超え、その内インドネシアと南洋諸島だけで過半を占めている。また、内地

表1　横浜市出身者の地域別戦没者数

| 地域 | 陸軍 | | 海軍 | | 計 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 満洲（関東州を含む） | 720 | 4.9% | 1 | 0.0% | 721 | 3.6% |
| ソ連地区 | 519 | 3.5% | 2 | 0.0% | 521 | 2.6% |
| 朝鮮 | 166 | 1.1% | 14 | 0.3% | 180 | 0.9% |
| 北方地区（ソ連地区を除く） | 102 | 0.7% | 72 | 1.4% | 174 | 0.9% |
| 中国 | 2,772 | 18.8% | 155 | 3.1% | 2,927 | 14.7% |
| 仏印・タイ・ビルマ | 970 | 6.6% | 84 | 1.7% | 1,054 | 5.3% |
| 比島 | 3,257 | 22.0% | 706 | 13.9% | 3,963 | 20.0% |
| ニューギニヤ方面 | 1,528 | 10.3% | 146 | 2.9% | 1,674 | 8.4% |
| サイパン・グアム・テニアン・マライ・ボルネオ他 | 1,183 | 8.0% | 1,492 | 29.4% | 2,675 | 13.5% |
| その他南洋諸島 | 1,038 | 7.0% | 1,167 | 23.0% | 2,205 | 11.1% |
| 台湾 | 188 | 1.3% | 101 | 2.0% | 289 | 1.5% |
| 沖縄 | 777 | 5.3% | 19 | 0.4% | 796 | 4.0% |
| 硫黄島 | 199 | 1.3% | 137 | 2.7% | 336 | 1.7% |
| 内地 | 503 | 3.4% | 755 | 14.9% | 1,258 | 6.3% |
| 不明 | 859 | 5.8% | 219 | 4.3% | 1,078 | 5.4% |
| 合計 | 14,781 | 100% | 5,070 | 100% | 19,851 | 100% |

注：『生活援護課業務関係資料集』（神奈川県福祉部生活援護課、1994年）より作成。

表2　鶴見区の時期別戦没者数　昭和12年7月以降

| | 昭和12年7月～ | 昭和12年7月～ | 18年 | 19年 | 20年8月15日迄 | 20年8月15日以降 | 不明 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 内地 | 15 | 10 | 22 | 46 | 323 | 40 | 2 | 458 |
| 朝鮮・台湾・樺太 | 0 | 0 | 2 | 15 | 12 | 13 | 0 | 42 |
| 中国大陸 | 100 | 32 | 28 | 69 | 64 | 70 | 7 | 370 |
| 南方 | 3 | 28 | 48 | 388 | 428 | 43 | 8 | 946 |
| その他太平洋 | 0 | 2 | 2 | 22 | 9 | 0 | 0 | 35 |
| その他 | 4 | 2 | 13 | 39 | 24 | 41 | 0 | 123 |
| 不明 | 4 | 0 | 3 | 9 | 1 | 3 | 1 | 21 |
| 合計 | 126 | 74 | 118 | 588 | 861 | 210 | 18 | 1995 |
| | 6.3% | 3.7% | 5.9% | 29.5% | 43.2% | 10.5% | 0.9% | 100% |

注：『横浜市史Ⅱ』第1巻下（横浜市、1996年）掲載の表より作成。

が一五％近くあるのは、日本近海で艦船が沈没した結果だろう。

なお、戦死の時期については、県の統計に情報はない。そこで、横浜市戦没者慰霊塔の名簿の内、市内で最も戦死者の多かった鶴見区について集計した数字を紹介しておく（表2）。それによると、一九四四（昭和一九）年から敗戦までの期間が、七二％以上を占めている。一九三七（昭和一二）年から一九四三年までが約一六％、一九四五年八月以降も一〇％を超える。

戦没地と戦没時期いずれからも、太平洋戦争末期に南方で集中的に多くの戦死者を出したことがわかる。こうした戦死者に関わる客観的な統計数値もまた、過酷な戦争の実態をよく示しているといえる。

## 軍隊手帳

これに対して、軍隊手帳と軍事郵便は、一人一人の戦争体験をより具体的に伝えてくれる資料といえる。その内容を読み解いていこう。

軍隊手帳は、徴兵検査を受けて兵役につく者全員に与えられた。まず冒頭に軍人勅諭・勅語が赤字で印刷され、さらに心得と一九四二年からは戦陣訓が掲載されている。

以下、本人に関わる情報と軍歴が記入されていく。軍管区・部隊名・兵種・官等級（階級）・本籍・住所・氏名・生年月日と、身長や帽子・服・靴のサイズなどを記入する欄もある。横浜市史資料室所蔵の軍隊手帳を見る限り、大正期など古い時期のものには、身長や被服等に関する記載があるが、昭和期に入ると未記入の場合が多い。

続いて現役・補充兵役・後備役・国民兵役などの年限を記す兵役欄があり、学歴や精勤賞・褒賞と善行・適任欄が続く、これらの欄は未記入の場合もある。そして、詳細な軍歴を記す履歴欄に、入営・入隊から配属部隊・派遣先と除隊・召集解除、簡閲点呼などの記録が、年月日と共に詳細に記される。

以上が軍隊手帳の内容であるが、なかでも身長欄が興味を引く。実は、徴兵検査において最も重要な基準は身長だった。一八八九（明治二二）年に法律として制定された徴兵令の下では、五尺（一五一・五センチメール）が合格とされていた。一九二七（昭和二）年制定の兵役法の下では、一五五センチメートル以上を合格とし、現役兵は一六五センチメートル以上が望ましいとされた（兵役法施行令）。これは、一九三七年の改正により、それぞれ一五〇センチメートル以上と一六〇センチメートル以上に引き下げられた。

横浜市史資料室が所蔵する軍隊手帳の内、身長の記載があるのは二つだけである。その一人吉原朝次さんは、身長は五尺四寸一分で約一六四センチメートル、靴は一一文で二六・四センチメートルと、当時としては体格はよかったようだ。軍隊手帳には、徴兵検査の結果等は記載されていないので推測にとどまるが、甲種合格だったかもしれない。

吉原さんの軍歴については、『市史通信』前号で紹介している。砲兵として一九二六年一月の現役入営から一九四三年の召集解除までの間に、一九三七年と一九四一年の二度召集され、一度目は上海で負傷している。これらの記録が、全て履歴欄に記入されている。

もう一人の小野浩雄さんについても、第二四号で紹介した。身長は五尺二寸五分というから一五九センチメートルほど、足のサイズは一〇文で二四センチメートルと、当時としては平均的な体格といえよう。輜重兵として一九一七（大正六）年に現役入営してから二〇年後、一九三七年に四〇歳で召集され、翌年召集解除となっている。

二人とも日中戦争開戦間もなく、吉原さんは三二歳と三七歳の二度、小野さんは四〇歳という兵役年齢上限で召集された。このように年齢の高い補充兵が召集されたのが、日中戦争の実態であったことも、軍隊手帳の記載から知ることができる。

小野浩雄さんの軍隊手帳
横浜の空襲と戦災関連資料（小野浩雄氏提供）

## 軍事郵便

軍事郵便は、駐屯地あるいは戦地から野戦郵便局を通じて送られた葉書や封書である。「軍事郵便」と印刷された専用の葉書や封筒があり、無料で送ることができた。様々なデザインの絵葉書もあり、軍の酒保で売られていたようだ。また、挨拶状など戦地で文面を印刷したと思われるものもある。

内容は部隊長が検閲し、検閲済のスタンプが表に押された。作戦に関わる地名などは、〇〇〇と伏せて記されていることがある。消印が押されず、年月日がわからない場合が多い。家族や

知人が兵士に宛てた葉書や手紙は、普通郵便と同様切手を貼って送るが、やはり野戦郵便局を通じて兵士の元に届けられた。兵士が受け取った郵便物が残されていることは、比較的少ない。

兵士の差出・宛先の住所に当たるのが所属部隊名であるが、日中戦争以降全て通称号で記されている。これは、軍隊手帳の履歴でも同様である。

通称号がどの様に制定されたのかを説明しておこう。始まりは、日中戦争による動員であった。一九三七年九月一日の「動員部隊等ノ称呼名ニ関スル件」で、外地部隊は部隊長の姓を冠して称呼すると定められた。たとえば、日中戦争後に甲府で新たに編成された歩兵第一四九連隊は、連隊長津田辰参の名から津田部隊と呼ばれた。

しかし、これでは部隊長が代わる度に名称が変わることになり、不便であったことと、さらに秘匿性を強めるため、一九四〇年七月二九日付「通称号使用ニ関スル件」により、部隊長名を文字符に改め、各部隊に通称番号を割り振り、両者の組合せによる通称号を使用して、軍部外者に対して部隊の固有名や編成を秘匿することとした。その後、在満・在支・南方軍各部隊に随時通称号が割り振られていった。

横浜市史資料室所蔵資料中安室吉弥家資料にある一〇〇通を超す軍事郵便は、ほとんどが一九四〇年以前の満州・中国からのもので、隊長名による称呼名が記されている。これについては、先の津田部隊のように、当時の隊長名か部隊名のどれかがあらかじめわかっていないと特定するのは困難である。

安室家の軍事郵便の場合、津田部隊と明記されているものは一九通ある。たとえば、「上海派遣軍伊東部隊気付津田部隊石井隊　小島弥一」といった具合である。上海派遣軍は編成替えで中支派遣軍となり、他に斉藤弥部隊所属となっているものもある。

当時の派遣軍の編成から、伊東・斎藤弥はそれぞれ師団長伊東政喜と斎藤弥平太を指し、部隊は第一〇一師団であることが判明した。つまり、上記の場合、「上海派遣軍第一〇一師団歩兵第一四九連隊」となる。石井隊は中隊名と思われるが、今のところ不明である。また、津田部隊以外については、まだ固有部隊名は解明できていない。

## 部隊の通称号

これまで『市史通信』で紹介してきた軍事郵便を例に、もう少し部隊名について検証してみたい。前号で紹介した田中国一郎さんについても、その後部隊名が特定できた。

田中さんは一九四四年、東部第三八部隊（歩兵第一五連隊）に入隊し、北支派遣軍に配属された。翌年届いた軍事郵便には、所属部隊が甲第一八二八部隊とあった。これは、同年二月に北京で編成された第一五二兵站病院であることがわかった。おそらく、警備につく衛兵などの要員であったのだろう。

北支にて　向かって右端が田中国一郎さん
田中一郎家資料（複製）

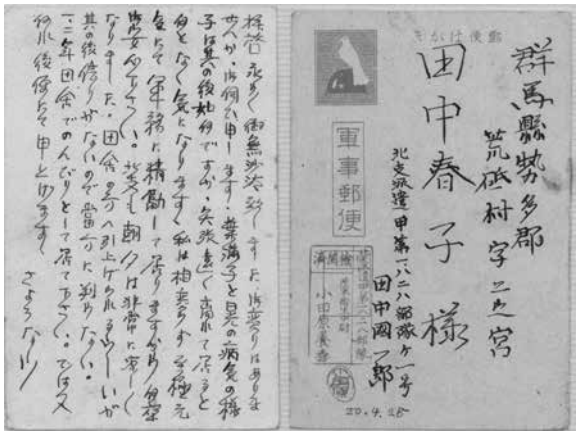
一九四〇年以降の通称号についてその固有部隊名を調べるには、アジア歴史資料センターでも公開されている「通称号に関する綴」中の通称号表、あるいは「陸軍部隊調査表」や「課別部隊通称番号一覧表」などで調べることができる（以下、旧日本軍関係の資料はアジア歴史資料センター公開による）。

また、各部隊の略歴にも、固有部隊名と通称号が併記されている場合があり、部隊名を特定する手がかりになる。先の甲第一八二八部隊は、「北支那方面部隊略歴」の中に含まれていた。

田中さんはその後、陣第二九九八部隊、次いで陣第二九九四部隊に転属となった。第六三師団工兵隊と独立歩兵第七九大隊である。いずれも、「陸軍北方部隊略歴」と「満州方面部隊略歴」の両方に、部隊略歴が含まれ、一九四五年六月から八月にかけて北支から満州に移動したようだ。田中さんは八月末に満州の軍病院で戦病死するのだが、部隊の移動の経緯と合致している。

第二四号で紹介した長島秀夫さんの軍事郵便についても、見てみよう。長島さんは、一九四二年一一月に東部第一七部隊（近衛輜重兵連隊）に入隊し、翌年三月に栄第一六四四部隊に配属されて南京に行った。これは、中支派遣軍防疫給水部が正式名称である。

その後同年九月、長島さんは南方への移動を命じられ、一ヶ月後海上で戦死する。同年一二月二六日付の戦死通知が、軍事郵便で第七三八一部隊から届く。通知文書は、姫路師団参謀長名である。第七三八一部隊は姫路で編成された第一七師団司令部のことであり、参謀長名の戦死通知とつじつまが合う。




田中国一郎さんの軍事郵便　1945年
疎開中の妻に宛てた葉書　田中一郎家資料（複製）

第一七師団は、大正期に軍縮で廃止された師団を日中戦争開戦後に姫路で再編成した師団である。中支派遣軍に属していたが、一九四三年九月に南方転進を命じられ、ニューブリテン島に向かった。長島さんはおそらく、この師団所属の部隊に転属し、輸送船で移動中に戦死したものと思われる。

戦死後の恩賜金の下賜などについては、原隊である東部第一七部隊からの通知が残されている。結局、戦死時の所属部隊は不明のままである。なお、ニューブリテン島は有名なラバウル基地があった島で、現在はパプア・ニューギニアである。

**濠北派遣軍**

次に、これまで未紹介の軍事郵便も、紹介しておこう。戦後、日本社会党の県議会議員を長く務めた伊藤博さんの軍事郵便と、留守を守った妻喜久さんの日記が残されている（伊藤博資料）。伊藤さんは、もともと文学志望で、自身の戦争体験を元にした自伝的小説『太平洋戦争』（桜楓社、一九七八年）を書いている。妻の日記もこの小説のなかに、人名は小説上の名前に変えられているが、ほぼ全文引用されている。

伊藤さんは一九一〇（明治四三）年生まれ、東京高等師範卒業後、中学校（旧制）の教師となり、戦後も神奈川県で高等学校の教師を務めた。一九四四年一月召集され、東部第六四部隊に入隊した。これは佐倉の連隊を指すが、佐倉では歩兵第五七連隊・歩兵第一五七連隊が編成された。伊藤さんの場合、前年佐倉に移駐してきた近衛歩兵第五連隊補充隊に編入されたと、『太平洋戦争』のなかで記している。

東部軍の通称号については、「東部軍隷下固有（通称号）部隊号表」などもあるが、各連隊区では日中戦争後新たな連隊の編成が相次ぎ、時期によってどの部隊を指しているか特定するのは難しい。ちなみに甲府連隊は東部第六三部隊であるが、ここでも歩兵第四九連隊の留守部隊により第一四九連隊・第二一〇連隊が編成されている。

その後、伊藤さんはハルマヘラ島（現インドネシア）へ派遣される。戦地からの軍事郵便には、「濠北派遣輝第一〇六二九部隊第一古山隊」とある。濠北とは、濠州の北、つまりオーストラリアの北部ということで、古山隊は中隊長古山久衛の名を取ったものである。輝第一〇六二九部隊は、第二方面軍野戦貨物廠を指している。

「廠」とは、元々は広い建物を意味するが、旧日本軍は軍の工場・倉庫などを、たとえば「造兵廠」「補給廠」などと称した。『太平洋戦争』によれば、伊藤さんの所属部隊は第一開拓勤務隊といい、原地で自給自足のために農業・畜産・漁業に携わる要員として編成されたという。

現地に入って間もなく伊藤さんは、輝第一六三〇〇部隊に転属する。これは、濠北派遣軍の中核である第二方面軍司令部のことである。伊藤さんは、司令部のあるセレベス島に移り、経理部建築課に配属された。部隊の宿舎を建設し、衣食住に必要な資材を調達するのが任務だった。その後、伊藤さんは原地で敗戦を迎え、一九四六年六月に復員を果たす。

以上紹介してきた部隊名は、いずれも先にあげた部隊名の表などで確認することができるが、部隊には様々な任務があり、その内容は部隊略歴や当事者の証言がなければなかなかわからない。伊藤さんの場合、軍事郵便、家族の日記、そして自伝的小説がそろっているため、戦争体験を詳細に再現することができる珍しい例といえよう。

**軍歴**

最後に、前号で紹介した桐谷一さんの軍隊手帳を例に、軍隊手帳の履歴欄の記載を見てみよう。桐谷さんははじめ満州に派遣された後、沖縄の守備隊に転用されたため、たいへん複雑な転属・移動をしている。

桐谷さんは、一九四三年九月の臨時召集により東部第八八部隊に応召した。これは、電信第一連隊（相模原）を指している。その後満州に派遣されて配属された部隊として、満州第二九部隊・満州第一一部隊・満州第四九八部隊・満州第二五二七部隊が記されている。

最後に配属された満州第二五二七部隊は電信第二七連隊と特定できるが、満州第二九部隊は通称号の表にも記載がなく不明である。その他、満州第一一部隊は第三軍司令部、満州第四九八部隊は関東軍経理部鉄嶺出張所となっていたが、通信兵の桐谷さんがどのような意味で配属されたのか、定かではない。通称号は時期や方面による違いもあるので、部隊を特定するのが困難な場合もある。

その後、一九四四年六月に桐谷さんは沖縄方面に派遣されて、また複雑な転属を繰り返す。まず、球第一六一六部隊（第三二軍司令部）の戦闘序列に編入、那覇で球第七一六五部隊（独立混成第六四旅団司令部）に所属し、徳之島に派遣されて球第一八八三〇部隊（電信三六連隊）を経て、一九四五年一月に宮古島に移り、豊第五六五三部隊（第二八師団通信隊）に転属となり、敗戦を迎える。

以上、軍事郵便と軍隊手帳に記載された部隊名を中心に、読み解きを試みたが、旧日本軍における様々な部隊と任務の一端を見ることができた。軍事郵便または軍隊手帳が残されていれば、おおまかな兵士の軍歴を確認することが可能である。さらに、兵士自身の証言や手記などが加われば、戦争体験を細かく再現することができる。

兵士たちが生きた時代を理解するために、今後も兵士に関わる記録を集めていきたい。お手元に元兵士にまつわる書類や写真、日記、書簡、葉書などがあれば、ご一報下さい。

（羽田博昭）